〔江戸名所圖會十七〕隅田河渡

橋場より須田堤のもとへの古き渡なり、今は橋場の渡と唱ふ、

〔淺草志三〕隅田川渡　橋場の渡しともいふ、橋場より隅田村へ渡す、むかしの奥州街道なり、

〔類聚三代格十六〕太政官符

應造浮橋布施屋幷置渡船事

一加增渡船十六艘略○中

武藏下總兩國堺住田河四艘元二艘、今加二艘、

右河等、崖岸廣遠、不得造橋、仍增件船、略○中

承和二年六月廿九日

〔伊勢物語上〕むかし男有けり、その男、身をえうなき物に思ひなして、京にはあらじ、あづまの方に、すむべき國もとめにとて行けり、もとより友とする人、ひとりふたりしていきけり、略○中ゆきゆきて、むさしの國と、さもつふさの國とのなかに、いとおほきなる河あり、それをすみだ川といふ、その川のほとりにむれゐて思ひやれば、かぎりなく遠くもきにけるかなとわびあへるに、わたし守、はや舟にのれ、日もくれぬといふに、のりてわたらんとするに、みな人物わびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず、さる折しも、白き鳥の、はしと足のあかき、さぎの大さなる、水の上にあそびつゝ、魚をくふ、京には見えぬ鳥なれば、みな人みしらず、わたしもりにとひければ、これなん都鳥といふをきゝて、

名にしおはゞいざこととはんみやこ鳥わがおもふ人は有やなしやと、とよめりければ、舟こぞりてなきにけり、○又見古今和歌集

〔更科日記〕野山あしをぎのなかをわくるよりほかの事なくて、武藏と相模との中に有て、あすだ